57 X
51
7

訓幼字義

卷六

性

情

幼字義卷之六

性 凡 條

性と云人の生たるまゝの天理を云性者生之質也と云この故を分明に
云ず空受命よりいふ孔子の性相近也と云も
をそして性をふ
子の性善も有ものへかいも
ゆゑ生身のてまゝ宋朝より本然性
を気質のこゝろ
まゝれ

五 ●おもふに性の説まことに書経の湯誥に
爲ㇾ惟皇上帝降ㇾ衷于下民 若有恒性と
大雅 蒸民の篇に天降ㇾ蒸民有
物有則 民之秉ㇾ彝好 徳と
これ等の語性の説のよるべきの門
口吉の文 生而知之 学而知之 困而学之
ま夫子 性を論ずるの門かれい
ま夫子 性を論ずるの門かれい

性相近也習相遠也の一語考
の三氏諸の説とい各別
ま夫をはしめとして 孔子 孟子
書かて 性を論ずる人
孔子の大旨 抵 孟子の性善
ぶ人〳〵 孟子の性善
ぶ人〳〵 孟子の性善

の生付ありて物に生付るもの何
物へ移しても
かくのごとく千万人のよく
事なりて人の教へ畢竟其善の
みなるものなり
善をすゝむることをしらず人の
ゝ等閑のごとくこれをまもりて
性おもむき
教をまもりてのまた性をもとめ
いふあるべし
二●本性善悪の性ともいふ模様の
張より始るものなり正蒙云形而後
有気質之性君子有所性者焉この教を
思ふにまことに
てをや気質の名あり本然てをや

故気質之性君子有所性者焉この教を
思ふにまことに
てをや気質の名あり本然てをや

の正理より生ずる性の気まうる
の意味より天地人に具りる理
を云てまた五ての命と云人ま五ての性と云
知あつるの理と
性まて名てそを仁義礼智と云同ま
ミ五ま（き）くまでのおまあ人のか
のてく生なして
の大至より正夫正婦のおろかか

七のて元有生者これあをとまて
（かく）くまサのちいとまかまをかりまる
天上の月つまし空
はりてまし一
みく人のあまを
様の理より程子
云弁至於達人一也朱子曰性者人生稟
之天理也とまりて気質の性と

人の生存ふさまくあるを見
るものあり又全
も乃ち事務
のかうさてよ
を等使の性
書かり
三
ふうさ甲一人の
外甲ふさ
ふうさ
いとふく
ふうさ
等債のふ
物件の
件の
ふうさ
かふの
人の
陶ふ

ふうさ甲一人を甚だ
等債のふ物件を
物件の義
件の
ふうさ
ふうさ
ふうさ

於外の性を言かつてすでに自己
の素性を言ひて性のもとめをかつる
ものなり孟子明
て於外の明をとかつてるる 程子曰
才稟於気と有清濁者を以
稟具河者を而知之則与其清
河皆可至於善而 復性之本これ
気を執しるもの 朱子曰渾然至善
書有悪人矣 堯舜初せず但元

人汨於私欲而失之 堯舜則無私欲
之蔽而能充其性耳と これ知覚の義
をもつてをいつて又大学嘉言向て
明徳を 解 二 明して但為気稟所拘
所蔽則有時而 人
蔽而遂明之以復其初也これを 京
知覚をもつて 私 をこゝに 伊先
の説をおもて 生人の旨 ふかゝす

四●宋朝諸儒の學術の自ら於て人の
學ぶに及ぶまでの人數のおほそれの
それをさへのそ時の學人の性質をこ
ろふくらべ
ゆる平等しやうとせる世界主義の一言
を以て話説としてみる
第多數のつうてなの磯より
みまでてみるうまでの
まちくの所
[illegible]

捨て仁義を棄てを捨て書を焼き書
師を逐ひて先生を方ままちくのほきの
學問を異てはかりをつとめ世智の
學校なきまでそれ
まて見れば大抵
皆事實のよる知て而已ま
こちらに善き書をさしう
申れば食を保一日なれをのひ

又われ孝の至あれば至あり忠あれば忠あり君われを用ひおもむろに諫を聞くの度あれば諫を聞くの度あり吾身を清浄ならしむれば一家の清浄ならしむるの方あり吾心を誠にすれば人をして誠ならしむるの方あるかかるをもて

仲尼の徒は怪力乱神を語らず人をして

ゆるの方あるかくの如し

●性相近也と云近きは不遠之況や

てもみれかし

人の生付の善悪等あるやうなれども

大かた似よりたる大差のなきものや

まことにいかしこきの智のまれまれ大差あるやうなれども

あるも大まかなる

性にて定まれり言えるの
みに由てもるく無人の為めにて
ありてかくいえられあるまでに
性を一つとしてのみもしてお
とせしのもの
ものの性へ事情知不肯
違ありやうをもまたしかりとの
のまとそこみまみの性をの事

ものこの下五字の今もそうである
為めにさまの犯すものもあり
こころを唯上古の
ままにこうありたいが如きは
二与自暴也自棄也世天下自棄自
暴者非不皆曷為忌也徒と強度而才
凡有過人者多固辛是也豈人に具自
絶於善況之下五世芳其如別城也

其人の性善なるものもあるが
ごとく自暴自棄の
ごときものもあるが如しと
おつるところなくして畢竟みな
おまえ帰下五也と
曰不是不為也非不為也
其日こころを自ら
ものと朱子の門人王植脩

の花よ（三字）上（三字）（と）言（て）（貧）仇（作）
多（く）よ（る）も（の）（百）（こ）（て）（家）
あ（る）と（き）そ（の）（百）（こ）（て）（家）
百（て）（こ）（の）（お）（わ）り（迄）（こ）存（生）を
皆（の）注（よ）（い）（と）（も）白（癡）（と）（よ）（く）い
一（向）（に）（芸）（暗）（昧）（そ）（て）（唇）（の）（授）（授）（術）
も（の）（も）一（り）（の）（み）（そ）（と）も（の）（を）
と（て）（も）（い）（て）（も）（こ）（百）（へ）
（を）（を）（ち）（ら）（い）（ら）（ら）（筆）（対）

十三

仇（虎）（つ）（て）（き）（た）（も）（の）（の）（中）（仇）（ら）（そ）（い）（て）
百（か）（れ）（と）（も）（黙）（智）（ら）（ら）（う）（悪）（こ）（百）（へ）（そ）（下）百
（と）（い）（う）（の）（も）（云）（か）（ら）（大）（抵）
（き）（る）（人）（物）（の）（よ）（う）（こ）（の）（中）（へ）（も）（ち）（う）
（き）（よ）（一）（等）百（位）（体）（る）（も）（の）（の）（仇）（を）（み）（て）
（て）（も）（る）（う）（も）（そ）（と）（て）（も）百（不）（利）（の）（事）
（も）（の）（仕）（も）（う）（(）（ま）（た）（名）（を）（め）（る）
（も）（と）（も）（う）（と）（も）（う）（と）（も）（う）（と）（も）（う）（と）（も）（う）
（を）（も）（う）（と）（も）（う）（と）（も）（う）（と）（も）（う）（と）（も）（う）
（な）（と）（も）（う）（と）（も）（う）（と）（も）（う）（と）（も）（う）（と）（も）（う）
（う）（と）（も）（う）（と）（も）（う）（と）（も）（う）（と）（も）（う）（と）（も）（う）

時勢の變遷に應じ
ゆくべきものなり
の所説もまた
てゐる點も指摘
ともあるべし
△
●孔子の性そのもの
ものを論ずるの
子の論理を以て

善惡を成立せしむる
ものなり
ものを
ものの
ものと
ものの
ものを
ものの
ものを
ものの
ものを

百姓日用而不知

なりて
も

●善き者は性みな相近きも
みなおてもつものなり
陽明学朝も
やうやうまもまのことも
もまの性もそれも
初もなきを
心良き良能のもと
私の性あり
同室裏明す
まのそれ
手生人の
まの常
みな
そのの
みな仁愛をもつ

扱わりてこれを
大學と学要のもの
性なくいて
陽明
ある
脚す
子
ども
侍のよう
ての
大拙
仁愛をもつ

自晏、自晏の
一月をとんか
おもふさまに
をまもめんく
ろもの
九のやうに
訪曰人人有貴於己者弗思耳と
孟元 秀の
傳を手知

ろふこふ胡敬りてて
從年四年の事
以王をめ
の仁てこの
ろの殊
の祝
ちて
●先師の教
一祝今

牛之性猶今之牲與
之者のてよおもしろ実
のごとく牲も
古牲也等意
おもそれ
猶別よ
等作のごとく
●三ツ四人之性之善也猫水之就下也と
ひとしくして
又ありうるを
ものは
ひとしからず
ことわ
ひとしからざるものの
ごとく

流
水を以て性を
ながれうるものゝごとく
上へ流れうるごとく
いまる
ものゝ来原
ながれ
上へ流るゝごとく
ながれ
ものゝ
ながれ
ながれ
ながれ

一●まゝよみ告まふこてまして
之牲猶犬牛之性犬牛之性牛之性犬牛之性牛之性犬牛之性人之性狗之性
いてまゝよのいまもある性ことものまゝ
告よまつてまつる天の明徳也
白玉白雪の白きをみてとも
一点まゝなれ生まれ白羽
それまゝよ差別あり

畢竟言笑の如きは在家の男子
の如きを謂ふなり
云何ぞ能く如来の深
遠の秘蔵を了知せんや
如来の
●経中の偈言を云ふ
一切人皆有知見
無仏異於此
不能対治故
是故汝当知
諸仏無有異
仏子住此地
乃能知是事
如此別大牛
其性甚麁悪
常為諸衆生
而作大利益
其牛有四足
両耳及両角
眼目鼻口尾
一一皆具足
其牛有大力
能駆諸悪獣
其牛有大身
威猛甚可畏
其牛有大声
普聞於十方
其牛有大智
能知諸衆生
其牛有大慈
普救諸衆生
其牛有大悲
能断衆生苦
其牛有大喜
令衆得安楽
其牛有大捨
離憎愛怨親
其牛有大定
心常住一処
其牛有大慧
能知諸法相
其牛有大神通
能現種種身
其牛有大方便
能入諸法門
其牛有大威徳
一切皆恭敬
其牛有大名称
普聞於世界
其牛有大荘厳
見者心歓喜
其牛有大光明
普照諸世界
其牛有大清浄
譬如雪山王
其牛有大勢力
譬如須弥山
其牛有大安隠
譬如大地
其牛有大堅固
譬如金剛
其牛有大調伏
譬如大海
其牛有大威力
譬如大龍
其牛有大自在
譬如大風
其牛有大無畏
譬如師子
其牛有大清涼
譬如月輪
其牛有大端厳
譬如日輪
其牛有大照明
譬如帝釈
其牛有大名聞
譬如梵王
其牛有大尊貴
譬如法王
其牛有大法力
譬如仏陀
其牛有大智慧
能知諸法
其牛有大神力
能現諸仏
其牛有大方便
能入諸法

●告子兄弟篇 孟子與告子論人性之

服
服せられて畢竟をみの扱を物
てあ(う)まくゐたものおかげ
人も大かた
ものの性
性をそふて
もの
ものの性
みのをいひへ
こと大聖
不斉物之情
淫事あり
人の性
生る(う)
のあるとく
つとくを知

伊尹の若の
おを外して
引て井つを
言ふまでして
心性の性
せるの字と
字つ言ふの
ことまでも
なく

宇和二年の性
を初てもて
のいふ性
として言
そもく
おしなの
生まれた
ふの
を

人生而静已上不容
説才説性時不是性と又生而静。
（注子曰性相近也習相遠也
○○○求善於未始有惡之先而性之善可見矣と
いふ）

、言のみの学
を程子曰
説性と
生而静
朱子曰
性之善而
朝儒先説性

●畢竟苟和合の物ゝ
如て性を失ふものゝ
若無和合にて一法
若し定めて
法ゐ
ことの
是れ世界の
生ずる
ことを
ゐ
ゐ
ゐ

不論性不明之
程朱の說もよろしからず
の說もよろしからず
すとも云ひあらはし
是等は性をの
かゝるものとして
亦甚よろしからず
云論氣不論
子言是善惡混
是也論性
孟子言性善是也又曰孟子終身
未論所居不能杜絶苟枸こと
とゝもとゝもとゝもと

来諭之旨ありがたく拝承いたし候
拝承いたし候ハヽ性上不可拘一
物更毫所存無之候間をは無之
事候ハヽ過天候道候
致候須天理ニ基ニ而
おこれをおる
候をもとも
あるとも那珂
へからず
上ハ
咲人居多
ものハ
はものまゝ
まゝ而
候のハ
もと

性をそなえてこそ高貴の人ともいえるのであって、智慧のない人は、いくら身分が高くても、畜生と同じである。

四、見性の境地

一切衆生の本性は仏性であるから、仏性を見ることができれば、仏と同じ境地に入ることができる。

五、仏法の修行

仏法の修行は、仏性を見ることを目的とするものであるから、仏法を学ぶ人は、まず仏性を見ることに努めなければならない。

六、仏法の大意

仏法の大意は、仏性を見ることにあるのであるから、仏法を学ぶ人は、仏法の大意を知らなければならない。

七、仏法の修行

仏法の修行は、仏性を見ることを目的とするものであるから、仏法を学ぶ人は、まず仏性を見ることに努めなければならない。

八、仏法の大意

仏法の大意は、仏性を見ることにあるのであるから、仏法を学ぶ人は、仏法の大意を知らなければならない。

九、仏法の修行

仏法の修行は、仏性を見ることを目的とするものであるから、仏法を学ぶ人は、まず仏性を見ることに努めなければならない。

十、仏法の大意

仏法の大意は、仏性を見ることにあるのであるから、仏法を学ぶ人は、仏法の大意を知らなければならない。

十一、仏法の修行

仏法の修行は、仏性を見ることを目的とするものであるから、仏法を学ぶ人は、まず仏性を見ることに努めなければならない。

十二、仏法の大意

仏法の大意は、仏性を見ることにあるのであるから、仏法を学ぶ人は、仏法の大意を知らなければならない。

十三、仏法の修行

仏法の修行は、仏性を見ることを目的とするものであるから、仏法を学ぶ人は、まず仏性を見ることに努めなければならない。

十四、仏法の大意

仏法の大意は、仏性を見ることにあるのであるから、仏法を学ぶ人は、仏法の大意を知らなければならない。

十五、仏法の修行

仏法の修行は、仏性を見ることを目的とするものであるから、仏法を学ぶ人は、まず仏性を見ることに努めなければならない。

十六、仏法の大意

仏法の大意は、仏性を見ることにあるのであるから、仏法を学ぶ人は、仏法の大意を知らなければならない。

十七、仏法の修行

仏法の修行は、仏性を見ることを目的とするものであるから、仏法を学ぶ人は、まず仏性を見ることに努めなければならない。

十八、仏法の大意

仏法の大意は、仏性を見ることにあるのであるから、仏法を学ぶ人は、仏法の大意を知らなければならない。

十九、仏法の修行

仏法の修行は、仏性を見ることを目的とするものであるから、仏法を学ぶ人は、まず仏性を見ることに努めなければならない。

二十、仏法の大意

仏法の大意は、仏性を見ることにあるのであるから、仏法を学ぶ人は、仏法の大意を知らなければならない。

百姓上ゟ
てゝ
物
ゐ
と
ゐ
ゐ
ゐ

翺

室人性之善惡之分也。而孟子言性善。
却從孟子本意。原性之所從來。
推而極之。以見人之皆可以爲堯舜。
其意蓋有在矣。
雖伊尹亦言性善。
然其言曰。習與性成。
則是習亦性也。
又曰。若火之始然。
泉之始達。
苟養之可以保四海。
苟不養。
不足以事父母。
則是性之善。
又待養而後全。
其言固有不同者。
蓋孟子之言性。
專指其發之善者而言之。
伊尹之言。
兼其發與未發而言之。
其實一也。
然則學者之所以養其性者。
豈可以不謹哉。
況天下之惡。
皆生於性之不明。
而蔽於習之不善。
故欲明其性。
必先格物致知。
以去其習之蔽。
習去而性明。
則所謂善者。
固不假修而自全。
雖所謂惡者。
亦將變而之善。
此聖賢之學。
所以異於衆人。
而君子之所以貴乎學也。

自をおさむるの事
のつとめあるべし
一家内兄弟諸親類
男女奴婢のおのおの
とあるべし
天理明をもつて
のごとく自及而
吾性をもつて
よりて而の
及自とあるをも
身をおさむるをも
一家内兄弟
のおのおの
一家内兄弟諸親類
男女奴婢
天理明
のごとく自及而
吾性
よりて而の

○吾性をもつて弥千萬人
伊氏作用是性也弥北
渓安斎云伊氏把作用是性便過

南

日在船乃ち処世名人在船日見在
暮白船玉鳥奥行香玉口渡海

とあり 是なりてこれを伊勢も
きて性すきものあるを数寄の
心用ふあるもの伊勢の当伊勢の
流とそいふ倫理すき者
み倫流すき者とそいふ 先倫

別

生きる為を性とすることを
為を
為すを
為すをもって
為すをもって
為すをもって

確乎不拔之志而
以て之を
○

情 凡條

情とは人心の上より就て思量し挑み
動かすところ（こうごく）の生ずる所の
ものをいふ 礼記礼運の
篇に何 謂七情 喜怒哀懼愛悪欲七
者不學而能 とありて生まれながら
なり 先儒の説も心に事物を性

と云ふ發を精と云ふ發を情と云ふ
心統性情の説も此より出づるなり而て宋朝
諸賢の説く所も亦此の説を守れり故人
のを用ひあれば大抵宋儒の未だ言はざる
体用理氣本末一貫二致の旨を立られ
たるものなり而て西人の性の字を譯
するに Nature の字を以てするも
亦此の説あつて言ふ所の

我が
○先儒の説くが如く心は動靜を兼
て動靜を統ぶるの名なり性は情の
體の靜なるを指して言ふ
と云ふ朱子の心は水也性は水之靜情は
水之動理學氣質を水之靜清を水之動
心之理情者心之用と性は本なり又曰性者
をれ[illegible]ふ性は[illegible]

若あり要あるも其性の
其要のこゝろのまゝの
つゝましきまゝの
要民の法よそ
をはをの法
要ゝ防門(溺)
あるをいへ
まれゝ性
まれゝ
(情)

て性の若を見
の若あるを
口或云垂手性
手(儀)足(容)の
性のまゝ
人心の里(排)
生存のまゝ
ゝ性にまゝ
あゝ(排)

已發而皆中節謂之和
ら生ず

6 先儒曰喜怒哀樂の四情
天中爲の本也未發の
二の二段自和爲
婦のんを情とす
七の外ず本也
ず情ふ若爲の
ち

ちうち
ず先儒ふ誠情約情の
ずうち四論ず
ま二の到ず
七情ふ
云玉ふ曰爲ず
爲喜怒哀樂ず本
段と又朝祥の
節ず玉ふ

○大抵人を悪くさえ到かし事
みるとてもてもしてもを
してまゐるとこころあるみまふ
まてもいてもしてもいまれまる
と云ふ事之自然不自然の差別
あるとて又世の中の七事をな
好むも事の確月みんともねがい
人の化石をまもとて拉い人の乳をを
まて笑ふ之好まの悟うみんと云
てまてをかくまた或ハ又よ生事をさ
くまた事妙をまいまた人のあるさ
てを拉ひ人のてをまてなそ祈む
のおいまもかうとてみれよ
人なあるとといまされまれとも
まを拉ひいまれす等拉弁ろ
ものまて生物のこころみあ
まを云ふよ此山まを人を情都をはを
のとをみる非人情不近人情とを

ゝ
○漢罪錯ノ上書ニよゝ人情莫不欲壽三王
生之而不傷人情莫不欲富三王厚之而不困
人情莫不欲安三王扶之而不危人情莫不欲逸
三王節其力而不盡此類之謂也又移
却及人情ゝこれ等の
ゝまゝ情をけよあるゝ欲
ゝ心の出るとゝよあるゝ情
ゝ

ゝゝ又云ふの所あり芥堅(肥)
の軍(戦)よ姪(遣)
ふれゝ
ゝ
ゝ

QL57X
M51
7

まえがき

壬寅八月十六日朱抜ク

工ノ冊六十九丁

九月廿日夕

止